

## 蛍にまつわる話二題



### 中山とし子

さつま町の川内川上流域は、ネット情報によると、ゲンジボタル数百万匹（！）が飛び回る蛍狩りの名所である。県内各地から車で来られ、蛍舟も出るそうだ。あの小さな光る昆虫の群舞に、なぜ日本人はこれほど惹かれるのだろうか。

今から三年前、親しい友人のNさんの案内で、市比野の小さな川、樋脇川の蛍を見に連れて行ってもらったことがある。水辺に沿って百匹は超えるであろう蛍の群れが、フラフリ、フラフリとはかなげに飛び回っていた。観光を目指していないので、近隣の方々が三々五々、車を川のほとりに停めて鑑賞して

いらっしやった。蛍はよく死者の魂がこの世に一時的に現成したものと称せられる。文学的に都合の良い情緒的解釈で、誰も心底信じているわけではない。しかし、私は最近、そんなこともあるかもしれない、と密かに考えている。

二〇〇七年五月二十六日、珍しく実家の敷地内に蛍が飛んでいるのを見た。私が子供の頃の昭和三十年代、蛍は当たり前のように田んぼの上を飛び回っており珍しくもなかったものだが、それからの二十年くらいで急激に減少した。昭和四十三年に関西に移動してからの三十年間、故郷に帰省する機会は少なく、残念ながら田んぼの上を蛍が飛び回るのを見ることはなかった。全国的に蛍の復活が試みられるのは、ここ二十年内外のことではなからうか。

ところで、二〇〇七年五月二十六日だが、二〇〇四年夏から続く両親の介護のため、私は入来に帰省していた。母親が二〇〇五年七月十九日に倒れたため、以後、二〇一五年までの約十年間、年に数度、一週間くらいの介護帰省を繰り返して二年目だった。

実はこの日、つい最近、車の事故で一瞬間に昇天してしまわれた同級生のH・Mさんのお家を宮之城に訪ね、仏壇にお線香とお菓子を供え、ひとしきりご主人様と思い出話をしていた。そして、その日の夕方、副田温泉場の銭湯亀の湯で、出て来られるご婦人と鉢合わせた。その方は田舎には厳しい雰囲気を感じさせておられ、ほぼ直感的に、M子さんのお母様ではないか、とピンと来た。M子さんの実家は亀の湯のすぐ近くであり、子供の頃は、亀の湯でよくM子さんと一緒になったものだった。又、昔、母親がお世話になったこ

ともあって、私には親しい感情があった。その夜は特に口もきかず、銭湯から真っ直ぐレンタカーで中組の実家に帰った。帰り着いて車から降りると、荒れた菜園畑の隅の金柑の木に、何やら光るものがある。それが、すと動いたり消えたりする。かすかな光だが、もしかして、と心が弾んだ通り、やはり蛍だった。今にも地に落ちそうである。瞬間、「はら、M子さん！」と声が出た。私にはその蛍が亡くなったM子さんに違いないという確信があった。明日は温泉場のお母様に会いに行かねば、と思った。翌朝訪問すると、やはり、亀の湯で鉢合せたご婦人だった。話をする、と、ボロボロ涙をこぼされた。

もう一つは、これも二〇〇七年七月十二日のこと。東郷園に入所していた母親を見舞った帰り、帰り道の二渡にある高校の同級生の

お墓参りをした。O・Zさんとおっしやり、以前から気になっていた。お墓を知っていたわけではない。住所からこのあたりと見当をつけて村の中に入って行ったのである。そして、無謀にも村の方に尋ね、こんもりとした墓地に上がっていった。

Oさん（以下Oさん）は高校一年の時同じクラスだったが、それだけである。しかし、一種天才的などころがあり、高校を卒業するまで私は関心を寄せていた。どういう風かという、まず数学の天才だった。数学だけが常にトップ。200点満点の190点前後。対照的に英語は無残な点数だとの噂だった。教科書は学校に置いて帰ると学友たちが吹聴する通り、かばんはいつもぺっちゃんこだった。着ている制服もバンカラ風で、帽子には穴が開いていた。自分でわざと開けたのかもしれない。

数学のできない自分にとって憧れであったが、それに加えて、彼はラグビー部であった。ラグビーというスポーツは男性的で、頭脳を使い紳士的でもあって、そこに心惹かれていた私は、時々自習すると見せかけて気づかれないよう運動場に面した生物室から練習風景をチラチラと見ていた。部活に明け暮れ、特に勉強する風でもないのに成績は常にトップクラスというのも心憎い。後で聞けば、試合の組み立てなどは、主将のかわりに彼がやっていたそうである。でありながら、彼にはある種の暗い影が付きまといっていた。無口であり、授業中教師から指されても答えない、こともあった。明らかに知っていないながら、教師が眼中にない風もあって目立たなかった。ある時、偶然、彼の暗さの理由を知った。それから、陰から見守らずにはいられなくなった。家庭的理由で進学が難しいという点で

は、私たちは同じ境遇だった。本を読んだり詩を書いたりばかりして担任に怒られまくっていた私と違い、卒業が近くなると、理数系クラスの学友たちは猛烈に勉強し、多分、Oさんの場合はどっちでも良かったのだろうが、二か月くらいの勉強で地方の国立大学に受かってしまった。それを人づてに聞いた私は「彼はもうこれで大丈夫」と安心して、祝福と共に、彼への心配を止めた。それからOさんのことを思い出すこともなく三十年が過ぎた。

五十歳をま近に控えたある朝、とても幸せな夢で目覚めた。なぜか、Oさんと寄り添い、何を語らうでもなく安心しきった心持ちでただ微笑んでいる夢である。その夢は結構長い時間続き、やがて眼が覚めた。目覚めた時、今確かにここにいたという実感があつた。三十年間思い出すこともなかった同級生が、ま

るで夫婦のように寄り添っており、お互い何かうなづいたりしている夢に、一日を何か得た気分だった。

次の日も同じ夢だった。Oさんは高校時代のように憂いや鋭さはかけらもなく、落ち着いて自信をにじませた態度だった。こちらも頼り切つて不安がない様子である。朝目覚めて、又も同じ夢だったことに不思議を覚えながら、どこかでラグビー部の顧問でもしながら数学の先生でもしていらっしゃるのかな、と思いを馳せた。その日も一日中、どこかに旅でもしたような幸福な気分で過ごした。

三日目、又も同じ夢だった。彼は幸せそうには見えるものの、影が薄くなつたように思えた。こうなると、私の中にちよつと気味の悪い憂いが浮かんた。何かあつたのではないか。夢で知らせようとしているのではないか。

四日目の夜、今晚も現れるだろうか、と思

いながら眠りについた。しかし、もうなかった。この日以来、私はだんだん不安を募らせた。何かあったのではないか。誰かに聞きたい気持ちで頭がいっぱいになった。五十歳の同窓会に帰ってある人に尋ねた。不安は的中していた。人々は彼のことについて話したがらなかった。それで、私も口を閉じた。高校時代に聞いた彼の境遇が思い出された。後で聞けば、大学はすぐ中退していた。今のようにな手軽に借りられる奨学資金制度はなかった時代だ。優秀な人物だったのに、悔しかった。

そして、二〇〇七年七月、どうしても胸が収まらない私は、お墓を探して見知らぬ墓地を登ったのである。割とすぐにお墓は見つかった。夢を見たあの時だったのではないかと危惧していた予想とは違って、かなり早い三十代に亡くなっていた。何も持たずに来て

いたので、キャンデーを二個墓石の上に乗せた。その晩、八時ころだったか、外に出ると、かなり大きな蛍が縁側の前を飛んでいた。

「ああ…、Zちゃん…」と、つい、日ごろ学友たちに呼ばれていた呼称で呼びかけた。疑いもなく彼だと思われた。その蛍が逃げもせず近づいたりするので、両手で捕まえた。両手の中で、点いたり消えたりしている。放しなくなると、家の中に持ち込んだ。蛍は座敷をあちこち飛び回っては、柱や畳に止まる。

何か伝えたいことがあるように感じて、言葉少なに私も話しかけた。そして、部屋に入れたまま寝床に入った。が、やっぱり可哀そうになって外に放してやった。翌年、佛花とお線香を供えに再びお墓に参ったが、その夜蛍が来ることはなかった。Oさんもこれで納得したのかもしれないが、私も気持ちが悪く着いた。

最後の蛍の話は楽しい。二〇一七年九月、マレーシア旅行をした。クアラルンプールに移住した高校の同級生が遊びに來なさいと言ってくれ、様々な計画を立ててくれた中に「蛍鑑賞ツアー」が入っていた。クアラルンプールの近くのセラングール川では、一年中蛍の群舞が見られるという。蛍好きの日本人に人気があり、ツアーを組んでやって来るのは、ほとんどが日本人観光客たそうである。はかなく美しい蛍の生態に文学的付加価値を見出した日本人が、一年に一時期しか見られない日本の蛍に物足りず、ここでその欲求を満たしたいとやってくるわけである。友人と私は、友人の手配で雇ったインド系マレー人のガイド、スグさんの運転するタクシーで、昼間は周辺を観光しながら、夕食は川のほとりの中国系レストランでたっぷり中華料理を食べ



クアラルンプールの「蛍鑑賞ツアー」にて

ながら暗くなるのを待った。

船着き場まで行くとライフジャケットを貸してくれ、音のしないボートに十人くらいずつ乗って、広い川の中に漕ぎ出す趣向である。

その頃には、もう大きな木々の梢という梢に蛍の光が点滅するのを見ることができ。

川辺と言う川辺には、ぎっしりと、と言った方がぴったりくるくらいに大量の蛍が、小枝に付いて光を放っているのが見える。最近日本では希少昆虫である蛍の登場に、私は、あつちの岸、こつちの岸と、一匹も見逃すまいとする勢いでキョロキョロした。真っ暗な中に、蛍の光だけを頼りに小舟は静かに川岸を移動する。手を伸ばせば捕まえられるほどの近さ。感動して、つい感嘆の声があちこちの乗客から上がる。

私たちのすぐ前に、若いカップルが行儀よく坐っていた。後で聞けばインドネシアとミャンマーからの留学生だということであった。船頭さんが川岸に止まってくれた時、その二人の間に一匹の蛍がスーと飛んで来て、二人の肩のあたりや頭の上や膝の間を歩き来する。周囲の乗客も共に楽しんで、おー、おー、と歓声を上げた。二人は、はしやぐでもなく慌てるでもなく、相手を尊重しながら照れ合っている。その清楚な行動に、私は蛍以上に感動した。蛍が取り持つ縁で、この二人の留学生には幸せな未来が待っているに違いないと思われた。

(エッセイスト)

